

創刊60年、昨日も今日もこれからも

信徒の友

3

2025

日本
キリスト教団
出版局

特集

地域に立つ 教会

「ここに教会がある」
沖縄・うふざと伝道所



小さな声を聴くために、
その地に住む
私たちのできること

Koga

とよひら食堂 やってます

人間に託された責任の第一は
神より賜る食物を
互いに分かち合うこと。
御言葉に堅く立ち、とよひら食堂で
無料弁当の手渡しを行う教会の今に聞く。

稲生 義裕
いのうたけひろ

北海道日本キリスト教会
札幌豊平教会牧師

毎週金曜日、
一人ひとりに声を掛けながら、
教会の前で弁当を手渡します



月曜朝です。寒い札幌で路上生活をする方々にも、毎回20〜30食を届ける。この取り組みは、およそ9年前2016年、雪深き2月の教会総会での決心に始まりました。

神への信頼、交わした約束

その年、小会（役員会）は年間主題として「他者と共に、他者のために」を提案。それは、ヤコブの手紙にある「御言葉を行う人になりなさい（1:22）」「わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていて

ると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか（2:14）を意識したものでした。「主の御心は必ず成るとの信頼に立つ。主の御心を行おうとするならば、できない理由・やらない理由をあげつらうことは一切しないこと」との約束を交わした上で、総会は小会提案を採択しました。

この決断は札幌豊平教会が戦後50年を機に、1996年に単独の教会として行った「戦争責任告白」における戦争責任のまし方にふさわしいものでした。教

会の建てられた地の歴史を覚え、その地の歴史を刻む隣人と共に地域の課題を担う」というものです。隣人を自分のように愛する草の根の実践が、国の行く戦争に取り込まれない教会の人格を醸成するでしょう。

総会の翌月、日曜学校教師会は、教会に来る来ないにかかわらず、地域に生きる子どもたちに思いを寄せる具体的な取り組みとして「月曜日の朝ごはん」を提案。土曜日曜の2日間、学校給食を食べていない子どもたちの栄養状態は落ち込んでいます。月曜朝に食事を調べ、元気な子どもたちを学校に送り出した。

「それは良い、ぜひやりたい」。教会の女性たちが真っ先に声を挙げたものの、バスも地下鉄も動いていない早朝の調理には来れない。歳を取り過ぎた……と、かつて、泊原宛の建設阻止に動いた彼女たちも肩を落しました。けれど、神への信頼と互いの約束が、次の提案を生み出します。「人材を地域に求めよう」。早速、町内会に呼びかけるも、返事は「みんな高齢でダメだわ

」。地域の団体・個人を訪ねます。子ども、青年、福祉、平和、人権、憲法などに関心を抱く人に、次から次へと教会の思いを熱心に伝えました。

すると市民の方々が理解を寄せてくださり、同年6月末の月曜朝には食事会がスタート。ですが、子どもたちからは「俺たち朝は眠いんだ。飯食うより少しでも寝たい」という本音を聞くことに、それでも毎月地味に継続するうちに、夜中歩くことで凍死をまぬかれていた路上生活の方々の朝のオアシス、生活に困窮する独居高齢の方が質素ながらも温かいみそ汁で心を癒やす場としての役割を与えられました。

こんなスタートを切ったばかりの教会に、突然の要請が舞い込む。「毎週金曜日昼の炊き出しを引き継いでほしい」。「主の御心は必ず成る」。この決心と約束を交わした私たちが、今一度試されました。その時、たじろぐ教会の背中を押したのは市民の声でした。「まずは、始めてみましょう」。よし、やるぞ。

脱皮を目指し、小さな花を飾ったテーブルを囲み、でき立ての家庭料理を小ぶりの茶碗で楽しんでいただく。すると、食卓から「お替わりくださいー」の声しきり。和やかな時を皆で味わいました。

新型コロナウイルス市内感染始まる

毎週金曜の食堂開始から3年弱、さっぽろ雪まつりの開幕に合わせるように「新型コロナウイルスの市内感染始まる」とのテレビ報道が飛び交いました。

食堂の「3密」は集団感染を招く温床。教会は判断を迫られましたが、結論は出していました。「礼拝を捧げ続ける者は奉仕をなし続ける。礼拝と奉仕は1つの業の2つの姿。見えない神を礼拝する教会は、見える隣人への奉仕に生きる」。これを疑う者はないほどに、教会は御言葉によって育てられていました。直ちに食堂から弁当へと切り替え、休むことなく食に事欠く隣人への奉仕に向かいました。集団感染を出さないための、厳しい健康チェックや衛生管理、一人での調理、一人での弁当詰めもあり、厳しさの中で